

「歴史の終わり」からの始まり

マッキナリーRI 会長テーマも叶わず、先週、イスラエルのイランへの報復があり、残念ながら戦争は終息しそうにありません。

16日の日経に「ウクライナ敗北なら欧州は」という記事がありました。記事によれば、ウクライナ支援に否定的なトランプが当選すれば、ロシアが勝利する可能性が高まって、ロシアが「世界秩序」を決めることになり、自由民主主義を標榜する欧州は更なる脅威に曝されるだけでなく、EU 域内でも分断が進むとありました。そして、ロシアが勝てば、グローバルサウスなどの中立国もロシアに加勢する恐れがあって、民主主義の危機となる為、故に「ウクライナは決して負けてはならない」と結んでいました。この記事の直後、トランプからウクライナ支持発言と、また米議会でウクライナ支援案が可決したと報道があり幾分、安堵しました。この様に、双方、平和を希求しながら、大義や報復に固執する余り、話し合いより軍事解決を選ぶという負の連鎖が、戦争が終わらない最大の原因となっている様です。

フランシス・フクヤマという日系米国人政治学者が、1992年に「歴史の終わり」を著し、「冷戦が終結し、自由民主主義が共産主義に勝利したのは歴史の必然」として、歴史が終わったと宣言しました。しかしながら、それから30年を経りましたが、世界は未だ平和を享受することができません。

ロータリーは、平和の推進と共に DEI を新しい価値観として標榜しています。DEI など人道的で差別のない世界は誰でも共感する処です。ところが、フクシマは、多様性重視により過度にマイノリティに配慮する余り、マジョリティの不満を生むことになり、分断が生まれたと考えました。そして、分断による争いを回避する為には、人種、民族、宗教を超えた共通の信条や属性から成るナショナル・アイデンティティが必要で、これを根幹とすれば、民主主義が復活すると唱えました。

戦争を終わらせ、戦争の教訓を活かすことに対して、池上彰は歴史に学ぶしかないと唱え、戦争の理由を知ることが未来を変えると唱えています。また、昨日のTVでは、広島の被爆者が戦争を終わらせるには相互の理解が大切だと述べているのが印象に残りました。「戦争を終わらせる」については、以上の様に様々な見解がありますが、何れにしても、私は、つながりを深め、平和への弛まぬ努力が何よりも大切だと考えます。

先週、半田ガバナー補佐が来訪され、ウクライナのバレエ公演の支援要請がありました。益々混迷する世界情勢や人道支援を念頭に置きながら、避難地の日本で、人間らしくあることの素晴らしさを体現するバレエを楽しませて頂きたいと存じます。